最優秀賞

連れ添う

福岡県福岡市　山本　築

祖父が亡くなったとき、祖母は抗がん剤治療のために市内の総合病院に入院していた。祖父の葬儀を終えた私は、病室のベッドに横たわる祖母を見舞いながら、その訃報をどのように伝えるべきかと悩んでいた。その頃、抗がん剤の副作用で認知症のような症状を患っていた祖母は、長年連れ添った相手の死を認識できない状態になっていた。混濁した意識のなかで苦しむ祖母を前に、その訃報を口にすることは困難に違いなかった。

やがて抗がん剤の治療を終えた祖母の意識が戻りはじめ、どうにか日常会話を交わせるほどに回復した。私はベッドのそばに腰を下ろし、横になったままこちらを見つめる祖母とひさしぶりに言葉を交わした。祖母はこの数か月間ですっかり老いてしまったように見えた。痩せこけた頬と皮膚の伸びきった細い腕は抗がん剤の副作用によるものだった。その弱った身体に祖父の死を告げるのはひどく酷なことに思えた。私は意識して祖父の話を避け、見舞いの際は祖母と私の過去の思い出を語るように努めた。祖母はその話を目を細めながら聞いてくれた。それでもその口からは時々祖父の名前が発せられることがあった。

「じさん（じいさん）は元気にしよっどかい」

祖母は長いあいだ家を離れてしまっていることを悔やみ、以前から気管支の疾患を持っていた祖父の体調を心配した。

「いつも布団で寝とらすよ。ばさんのおらんけん、とぜんなか（寂しい）て言いよらす」

私はそのたびに嘘をつき、祖母の手を強く握った。祖母の手は頼りなく、幼い頃に私の手を引いて歩いていた頃のたくましさは失われていた。その痩せ細った身体に老衰の徴候を認めないわけにはいかなかった。

祖母の退院を一週間後に控えた日、私は担当の医師と相談し、祖父の死を打ち明けることを決めた。その日、私は祖母の病室の前で一つ大きく深呼吸をし、なるべく自然に振る舞えるように気持ちを整えてから扉を開けた。

病室ではいつものように祖母がベッドの上に横になっていた。その頃には身体の調子もずいぶん良くなったようで、私の姿を認めると、ベッドの上に起き上がって穏やかな笑顔で迎え入れた。その笑顔を曇らせることになると思うとやはり言葉に詰まったが、私は喉の奥から言葉を押し出すように話しかけた。

「ばあちゃん、もうすぐ退院ばってん、体調はどがんね？」

「もうこげん元気たい。はよ帰って、じさんの世話ばせなん」

必要な言葉はなかなか私の口から出てこなかった。しかし、これからの祖母の生活のことを考えると、きちんと言葉にして伝えないわけにはいかなかった。病室の窓からは広い敷地を有したショッピングモールの駐車場が見えていた。私はその駐車場に視線を向けながら言葉を発した。

「あんね、ばあちゃん。じいちゃんはもうおらんと。ばあちゃんが入院しとっあいだに、亡くなってしもたと」

私はついに祖母の顔を見ることができないまま、祖父の葬儀や四十九日が終わってしまったことを告げた。

祖母はじっと私の顔を見つめたまま、しばらく口を開かなかった。その顔は私の言葉を疑っているようにも見えたし、あるいは私の言葉がよく理解できていないようにも見えた。私は祖母が取り乱すのではないかと心配していた。闘病中に親しい人を亡くすのはつらいことに違いなかった。しかし、しばらくの沈黙のあと、祖母はとても穏やかな声で言った。

「そうね。もうおらんとね。死に目に会えんかったとは申し訳なかったばってん、しょんなか（仕方がない）たい」

祖母の言葉には祖父に対する哀惜も、それを黙っていた私に対する怒りも含まれていなかった。その後、祖母は何か考えごとをするように病室の一隅に目を向け、それ以上言葉を継がなかった。私はその横顔を眺めながら、仕方がない、と言った祖母の真意を推し量ろうとした。しかし、二人の築き上げた歴史を知らない私には、その真意を知ることはできなかった。ただ、祖母の凛とした表情から、六十年間連れ添った相手を弔う姿勢のたくましさを感じないわけにはいかなかった。

「退院したら墓参りに行かなんね。おっも（自分も）一緒の墓に入れてもらうごつ、お願いばせなん」

しばらくして祖母はまるで冗談を口にするときのように言った。そして、表情を決めかねた私に向かってゆっくりと笑顔を見せた。

退院後、祖母は祖父より二年だけ長生きして一緒のお墓に入った。私はそのお墓の前に立って手を合わせるたびに、そのときの祖母の横顔を思い出した。現在、私には八年間連れ添った相手がいる。いつかどちらかが先に旅立つことがあっても、祖母のように凛とした姿勢で見送ることができればと思う。